

# 災害と人権

## ～東日本大震災と福島第一原子力発電所事故～

### 見えないものへの恐怖



常福寺 住職 廣畑 恵順さん

歳未満だった子どもの甲状腺検査は今も継続されています。

避難所では皆さんとてもイライラして  
いましたね。先がまったく見えないし、  
人災だという意識があり、怒りの矛先は  
電力会社に向けられました。首都圏に福  
島県ナンバーの車で行ったら、放射能で  
汚れていると言われたこともありまし  
た。

放射能って、  
見えないし、匂  
いもない。何も  
感じないから、  
わからないんで  
すよ。警戒区域  
でも雨合羽を着  
て1時間なら大  
丈夫とか、根拠  
のない情報が流  
されました。

震災当時、18  
(公財) 福岡県人権啓発情報センター  
第50回特別展「3.11 被災地の声をきく」より参照

5年前、わたしは被災地支援活動を行ってきた筑  
紫女学園大学の方々と一緒に、東日本大震災被災地  
共同調査を行いました。

その時の「被災地の声」が今も忘れられません。

誰もが「つながり」、

「人権」を大切にする地域を

いざという時、助け合い、命が守られる地域を  
つくっていくことが大切です。

同じ地域で暮らす人どうしの普段からの「つな  
がり」が、災害時に重  
要です。

震災から14年となる  
今、もう一度、「被災  
地の声」に耳を傾けま  
しょう。

そして、「人権」を  
大切にすることは、か  
げがえのない命を守る  
ことであると改めて考  
える契機にしていきま  
しょう。



おりにふれて廣畑さんの言葉を思い  
返していたわたしは、今年8月、東北  
の地を再び訪れる機会にめぐまれま  
した。

宮城県気仙沼市では、河川は整備さ  
れ、街は新しい家々が立ち並んでいま  
した。

しかし、2025年3月現在も、約  
2万4千人が避難生活を強いられてい  
ます。

